

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370502

研究課題名(和文)ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞の実証的比較研究：発話実験と言語運用理論の開発

研究課題名(英文) Empirical contrastive study of German modal particles and Japanese sentence-final particles: Examining utterance experiments aiming to develop an linguistic performance model

研究代表者

岡本 順治 (Okamoto, Junji)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80169151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語の心態詞と呼ばれる語群(例えば、doch, halt, ja, mal, schon, wohlなど)は、話し手の心の態度を表すと言われ、1960年代後半から現代言語学で注目されているが、その働きの本質は未だに解明されていない。当プロジェクトでは、ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞(例えば、「よ、ね、な、か」など)を実際のデータに基づき体系的に比較した。その結果、3つの基本的な比較の基盤が設定された。それは、「話し手と聞き手の共有知識の調整」、「聞き手への訴えかけ」、「発話状況とその認識」である。私達が作ったこの言語運用モデルの枠組みにより、両者の共通点と相違点が体系的に明らかにできる。

研究成果の概要(英文)：It is said that modal particles in German (such as doch, halt, ja, mal, schon, wohl) represent epistemic attitudes of a speaker in a certain way and have been getting attention in modern linguistics since the latter half of the 1960, yet the core properties have not been pinned down. This project has compared empirical data of German modal particles with those of Japanese sentence-final particles (such as "yo, ne, na, ka") in a systematic way. As a result, three basic categories for the comparison are set up: (1) adjusting common knowledge between the speaker and the hearer, (2) speaker's appeal to the hearer and (3) the utterance-situation and its recognition by the speaker. We have developed the basic framework of a linguistic performance model, in which we can systematically pick up common features and different factors.

研究分野：認知言語学

キーワード：ドイツ語の心態詞 日本語の終助詞 共有知識 聞き手への訴えかけ 発話状況 事態把握 問主観性
言語運用モデル

1. 研究開始当初の背景

- (1) ドイツ語の心態詞(Modalpartikeln)は、話し言葉の中で多用され、従来は、「余分な語」「価値のない埋めくさ的語」であると思われ、せいぜいニュアンスを付け加える「感情的な言葉」であると考えられてきた。
- (2) 現代言語学では、1960年代後半から、語用論(Pragmatics)の枠組みで、心態詞の機能の研究が盛んになった。Arnt (1960), Krivonosov (1963), Weydt (1969) を出発点とする研究は、発話行為論、会話分析の一環として行われ、結局、その本質を捉えられずに放置された。
- (3) 1990年代から、心態詞を統語論、意味論、認知言語学、音声学、音韻論の対象として考える研究が現われ、現代の研究につながっている。
- (4) 当プロジェクトでは、認知言語学的アプローチをとる。ドイツ語の心態詞は、1960年代から話者の心的態度を示すと言われてきたが、本質的には、「話し手と聞き手の共有知識」を調整する行為、「聞き手への訴えかけ」、「発話状況とその認識」が関係することが分かってきた。これらは、日本語においては、主に(例えば、「よ、ね、な、か」のような)終助詞が担っている。

2. 研究の目的

ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞の

- (1) 使用のメカニズムを特定するような発話状況を特定し、追跡調査を行う。
- (2) 共通性と違いを実証的に明らかにできるようなコーパス(コンピュータ上で検索可能データセット)を作成し分析に用いる。
- (3) 言語現象を説明できるような言語運用モデルを構築する。

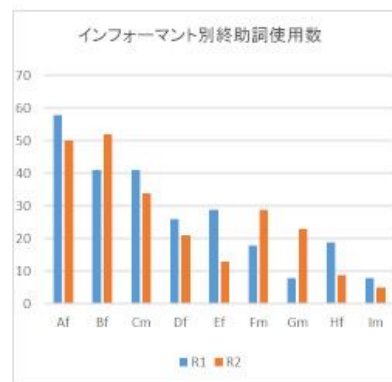
3. 研究の方法

- (1) 発話産出実験(2013年3月から5月に実施)は、10名のドイツ人母語話者と10名の日本語母語話者の発話音声データという形で保存されていた。当プロジェクトでは、それらの音声データの文字おこしをし、母語話者によるチェック、日本語はソフトウェアでの形態素解析をした後に妥当性チェックを経てから、統計処理、個々の心態詞と終助詞の機能分析を行う。
- (2) 新たに小説、映画などの言語資料からデータの抽出を行い、コーパスを作成する。
- (3) ドイツ語と日本語のデータの比較を、オリジナルの作品と翻訳作品があるものを対象にコーパスを作成する。
- (4) 母語話者に対しての聞き取り調査を行い、収集したデータの分析を行う。
- (5) 関連文献の収集を行い、それに基づき研究会を催し、議論しながら分析を進める。

4. 研究成果

- (1) 発話産出実験の結果は、岡本が2015年5月31日の日本独文学会で口頭発表した。発

話産出実験の目的は、発話環境に聞き手がいる場合(R1)といない(R2)場合で、ドイツ語の心態詞も日本語の終助詞も使用頻度に差が出るのではないかと、という仮説を実証するものである。これはコンピュータディスプレイ上に示される5段階の写真を見ながら最終的な写真に至るまでの写真に対して考えたことを発話してもらうというテストだが、前半は一人のアシスタントがその場に同席し(R1)、後半は同席しない形(R2)で行われた。結果として、出現合計数をトークンとして比較すると、心態詞は R1:15, R2: 9 であるのに対して、終助詞の場合は R1:240, R2: 235 となり出現数には圧倒的な差があるが、聞き手がいる場合(R1)といない場合(R2)に有意な差があるとは言えなかった。心態詞は、今回用意した発話実験の環境では出現しづらいこと、逆に特定の終助詞は頻繁生じることが分かったが、R1とR2の反応にはかなりの個人差が見られる(以下のグラフ「インフォーマント別終助詞使用数」を参照)。



- (2) この発話産出実験の結果、聞き手が発話状況にいるか否かが関与していないと断定することはできない。実験後の被験者に対する聞き取りの結果、実験中に考えていることを誰かに伝えるということを考えていなかったケースが多々あることがわかった。彼らは、「考えていることを伝える」ような発話行為をしておらず、むしろ、「言葉を使って見たものを描写する」行為しかしていなかった。今後、発話産出実験は、この不備を改良すべきである。同時に、「伝達」と「言葉による記述」は異なることを、今回の実験は明確に示したとも言える。

- (3) 小説、映画などの言語資料から心態詞や終助詞の比較ができるようなコーパスの作成を行った。宮崎駿『千と千尋の神隠し』の映画台詞、映画字幕、コミックの言語資料、村上春樹『国境の南、太陽の西』(日本語オリジナル・ドイツ語訳2つ)、ケストナー『エミールと探偵たち』(ドイツ語オリジナル・日本語訳2つ)など。その結果、従来、Es ist ja schönes Wetter. の ja と「いい天気ですね。」の「ね」が単純に比較され共通項が議論されてきたが、実際には、Sehr lange

dauert es ja auch nicht. (Kästner) 「そんなに長いこと笑ってたわけじゃないけどね。」(池田香代子訳)のような複合的表現が多く対応している反面、単発的な心態詞や終助詞は翻訳されていないケースが多いことも判明した。

(4) 言語運用モデルの構築に向けて、宮下は2015年以來、感情の認知的側面に注目し、心態詞ならびに終助詞が出現する際には感情表出が伴っていることを指摘し、心態詞や終助詞が記述された出来事を「感情的に活性化」している、と説明している(Miyashita 2017)。一方で、心態詞や終助詞は、知識から状況へ注意を向ける働きがあり、Ozono (2018)が考察している間主観性と事態把握の仕方の問題とつながる。このような心態詞と終助詞の認知的メカニズムを説明できる言語運用モデルは、話し手と聞き手の知識調整、話し手の聞き手に対する態度(訴えかけの仕方と強弱)、発話状況の把握の仕方、を包括するものとなることが明らかになった。

(5) プロジェクトメンバーの間で明らかになった共通認識と相違点: 岡本は、2015年から心態詞とイントネーションの関係に注目しており、終助詞に関しても類似の関係があると主張している(Okamoto 2017)。例えば、心態詞 *aber* には「驚き」を表す機能があるという従来からの主張(Helbig 1990, Zifonun et al. 1997, Müller 2014)に対して、「驚き」はむしろイントネーションにあると岡本は主張する。宮下は「驚き」を、むしろ感情の1つであると捉えている。ドイツ語で、*Das Fleisch ist ja hart!* と言った時、「驚き」は、イントネーションによって付加されるというのが岡本の考え方であるが、宮下は、話し手が心態詞 *ja* を用いて「その肉が硬い」という事態を驚きと共に捉えていることを聞き手に注目させ、聞き手の知識を活性化させると考える。背後には、大藪(2018)が主張するような事態把握の違いがあり、話し手と聞き手の間の知識調整が間主観的領域で行われていると考えられる。

<引用文献>

Arndt, Walter (1960) Modal Particles in Russian and German. In *Word* 16, 323-336.
Helbig, Gerhard (1990) *Lexikon deutscher Partikeln*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.
Krivonosov, A. (1963) *Die modalen Partikeln in der deutschen Gegenwartssprache*. Ph.D. Dissertation. Humboldt-Universität Berlin.
Miyashita, Hiroyuki (2017) *German modal particles and the cognition of emotion*. International Cognitive Linguistic Conference 14, University of Tartu.
Okamoto, Junji (2017) Die Modalpartikel *aber* und ihre Funktion unter

Berücksichtigung von Satztypen und Intonation. In Tanaka, S./E. Leiss/ W. Abraham/ Y.Fujinawa (eds.) *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik. Linguistische Berichte Sonderheft* 24. (2017), 251-270.

大藪正彦 (2018) 「ドイツ語の事態把握をめぐって 日独英対照の観点から」中村芳久教授退職記念論文集刊行会『ことばのパスpekティブ』(2018)、開拓社、pp.28-40.

Ozono, Masahiko (2018) Intersubjektivität am Beispiel von Modalpartikeln. Eine kontrastive Fallstudie aus japanischer Sicht. In 『静言論叢 1』(2018), 17-31.

Müller, Sonja (2014) *Modalpartikeln*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.

Weydt, H. (1969) *Abtönungspartikeln. Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen*. Bad Homburg: Gehlen.

Zifonun, Gisela/ Ludger Hoffmann/ Bruno Strecker/ Joachim Ballweg (1997) *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin: de Gruyter.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

Ozono, Masahiko Intersubjektivität am Beispiel von Modalpartikeln. Eine kontrastive Fallstudie aus japanischer Sicht. 『静言論叢 1』査読無 (2018), pp.17-31.

<https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/index.php>

[学会発表](計 11件)

Okamoto, Junji Deutsche Modalpartikel und japanische Satzendpartikel als schwache Funktionsspezifikatoren in Abhängigkeit von Intonation. Japanisch-deutscher Workshop Linguistik: Die Architektur von Grammatik und Pragmatik im Japanischen und Deutschen. Ludwig Maximilian Universität, München. (2015.8.22)

Ozono, Masahiko Intersubjektivität im Sprachvergleich. Japanisch-deutscher Workshop Linguistik: Die Architektur von Grammatik und Pragmatik im Japanischen und Deutschen. Ludwig Maximilian Universität, München. (2015.8.22)

Miyashita, Hiroyuki In welchem mentalen Zustand befindet sich der Sprecher, wenn er Modalpartikeln einsetzt? Japanisch-deutscher Workshop Linguistik: Die Architektur von Grammatik und Pragmatik im

Japanischen und Deutschen. Ludwig Maximilian Universität, München. (2015.8.22)

津村晋司、岡本順治「心態詞を含む感嘆文のイントネーション」 科研費プロジェクト研究会「ドイツ語の話しことばにおける音声と文法」早稲田大学 (2016.2.27)

宮下博幸「心態詞の出現とその認知的背景」 科研費プロジェクト研究会「ドイツ語の話しことばにおける音声と文法」早稲田大学 (2016.2.27)

Okamoto, Junji Absorbers of illocutionary force and their contradictory effect. German Society for Cognitive Linguistics. Universität Duisburg-Essen. (2016.2.27)

岡本順治「『驚き』に関する心態詞と終助詞の比較 心を読ませるための手がかり」日本独文学会、関西大学 (2016.10.23)

大園正彦「心態詞の義務性をめぐって 実証的アプローチ」日本独文学会、関西大学 (2016.10.23)

宮下博幸「心態詞の感情伝達機能 心態詞とその生起環境の分析」日本独文学会、関西大学 (2016.10.23)

Miyashita, Hiroyuki German modal particles and the cognition of emotion. International Cognitive Linguistic Conference 14, University of Tartu. (2017.7.14)

Okamoto, Junji Partikelempfindlichkeit und Sprecheranteilmahme im Japanischen und im Deutschen. 43. Österreichische Linguistiktagung 2017, Alpen-Adrian Universität, Klagenfurt. (2017.12.9)

〔図書〕(計 3 件)

岡本順治「『ちょっと』とドイツ語のmal ひとつの小さな語の使い方から見る認知的同期」高見健一・行田勇・大野英樹(編)『不思議に満ちたことばの世界』開拓社。(2017), pp.480-484.

Okamoto, Junji. Die Modalpartikel *aber* und ihre Funktion unter Berücksichtigung von Satztypen und Intonation. Tanaka, Shin/Elisabeth Leiss/ Werner Abraham/ Yasuhiro Fujinawa (eds.) *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik. Linguistische Berichte Sonderheft 24*. (2017), pp.251-270.

大園正彦「ドイツ語の事態把握をめぐって 日独英対照の観点から」中村芳久教授退職記念論文集刊行会『ことばのパーспекティヴ』(2018)、開拓社、pp.28-40.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.pocus.jp/modalpartikeln-vs-satzendpartikeln.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 順治 (OKAMOTO, Junji)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：80169151

(2) 研究分担者

大園正彦 (OZONO, Masahiko)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：10294357

宮下博幸 (MIYASHITA, Hiroyuki)

関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：20345648

(3) 連携研究者

牛山さおり (USHIYAMA, Saori)
学習院大学・外国語教育研究センター
(2014年)
研究者番号：40649589